

山口学芸大学 入学試験(令和七年度 一般 2期)

国 語 (時間 七〇分)

その一

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

現段階におけるメディアリテラシー教育の到達点を示すものに、坂本旬・山脇岳志編著『メディアリテラシー——吟味思考(クリティカルシンキング)を育む』がある。同書にはメディアリテラシー教育の先進国アメリカで活動する著名な専門家のインタビューが多く、^⑦ケイサイされている。(中略) いずれも意欲的な教育実践の指針を示しているが、メディアリテラシー教育の難題はむしろその前提にあるのではないだろうか。

多くの場合、メディアリテラシーは「メディアを批判的に読み解く力」と理解されており、そのためには批判的思考(クリティカルシンキング)が必要だと考えられてきた。しかし、この批判的思考はしばしばマスコミ批判と単純化されたようである。実際、今日インターネット上に氾濫する※「マスゴミ」批判もメディアリテラシー教育の意図せざる結果と言えなくもない。だからこそ、同書の第九章「批判的思考とメディアリテラシー」において教育心理学者・楠見孝は「批判は非難ではない」とわざわざ次のような前置きをしている。

批判的思考(クリティカルシンキング)は、「批判」という言葉から「相手を批判する思考」と誤解されて、攻撃的なイメージが持たれている。A、批判的思考において大切なことは、第一に、相手の発言に耳を傾け、証拠や論理、感情を的確に解釈すること、第二に、自分の考えに誤りや偏りがないかを振り返ることである。B、相手の発言に耳を傾けずに攻撃することは批判的思考とは正反対の事柄である。

それゆえ、同書の副題にもあるように、クリティカルシンキングに「吟味思考」という新しい訳語をつけることが提唱されている。「吟味」は念入りに調べて選ぶことであり、「批判」よりも十分な時間の必要を示すため、この点では高く評価できる訳語といえる。

しかしながら、「吟味思考」を学校におけるメディアリテラシー教育の成果としてどの程度まで期待できるだろうか。つまり、「吟味思考」する市民の比率をどのくらいまで高めることができるかと想定するべきだろうか。フェイクニュースが大統領選にまで影響を及ぼす分断社会のアメリカを見る限り、⁽¹⁾そうした教育実践の効果について、私は※デューイのようには楽観的にない。

メディアリテラシー教育論が楽観的に見えるのは、それが※市民新聞——^{マス・ペーパー}大衆新聞の対義語——の黄金時代に活躍したデューイの思想的系譜に連なるためでもあるだろう。人間の自発性を重視するデューイの教育論は、わかりやすく言えば市民新聞の読者層、あるいは教養市民層の教育論である。だが、⁽²⁾現在のメディアリテラシーの困難性は、そうした市民新聞(高級新聞)の読者モデルが一般化できるメディア環境ではなくなったことではないだろうか。その点では、SNS普及の影響が大きい。SNSは個人の情報発信力を飛躍的に高めるとともに、レコメンデーション(推奨)システムで大量のパーソナライズされた※フィルターバブルの情報伝達を可能にしている。

いま現在も五〇代以上の教師(新聞読者)と一〇代の生徒(ネットユーザー)の間で、メディア環境に対する認識ギャップは急速に拡大している。「学校はいつも遅れてしまう」と、※リップマンが一〇〇年前に発した言葉はますます有効なのだ。年配の教師がまだ学生だった一九九〇年代に接した初期インターネットでは、⁽³⁾篤志的なモチベーションに基づいたコンテンツ発信」が中心であり、その主要な担い手は一般大衆ではなく専門家だった。(中略)たとえば一九九六年に刊行された公文俊平編著『※ネティズンの時代』では、ネットワーク・シティズンが「⁽³⁾チ民」と訳出されていた。デジタル空間が大衆に開放された今日でも「チ民」はメディアリテラシー教育の達成目標かもしれないが、さすがに「ちみん」を口にする人はもういない。フェイクニュースに飛びつき陰謀論を拡散する「痴民」に文字変換される可能性が高いからである。

そもそも、サイバーシティズン(電脳市民)がどれほどクリティカルシンキング(吟味思考)をマスターしたところで、情報の真偽がそう簡単に見分けられると考えるべきではない。私たちが何かの専門家になるということは、別の何かの専門家ではないということの意味する。あらゆる領域で情報の真偽を見分ける能力など、たとえ情報分析のプロフェッショナルであっても個人的には持ち合わせていない。

だとすれば、フェイクニュースなどへの対応策として一般の人びとに求めるべきは積極的(ポジティブ)なメディアリテラシーだけでよいだろうか。むしろ、情報源を検討する判断基準として「ソ・ウ・カ・ナ」即断しない・鵜呑みにしない・偏らない・中だけ見ない」や「だ・い・じ・か・な」誰・いつ・事実・関係・なぜ」を生徒に教えることは必要だ。しかし、それでも見分けがつかない「あいまい情報」に直面した際に、どう対応すべきか、⁽⁴⁾それこそが問われるべきではないだろうか。

そのとき多くの教師は「より広くより深いクリティカルシンキング」を生徒に求めるのかもしれない。しかし、それは誰にでも、できることではない。リップマンの時代より情報量が爆発的に増大した今日、ますます不可能な要求である。そのために受け入れる情報を減量する「デジタル・ダイエット」が提唱されるわけだが、食事制限の継続が誰にもできないからこそ、ダイエット産業

は不滅なのではないか。

さらに言えば、私たちが情報に接するのはテストを受ける教室ではなく、快適に過ごす日常空間であることが圧倒的に多いはずだ。そうした空間で私たちが求めるのは、認知的な^⑦フキョウウを生まない心地よい情報である。その状況で私たちは「ソ・ウ・カ・ナ」「だ・い・じ・か・な」と[※]フアクトチェックをするだろうか。少なくとも私にはできそうもない。

こうした現状を考えた上で、私は前著『流言のメディア史』を次の言葉で結んでいる。

マスメディアの責任をただ追及していればよかった安楽な「読み」の時代はすでに終わり、一人ひとりが情報発信の責任を引き受ける「読み書き」の時代となっている。こうした現代のメディアリテラシーの本質とは、あいまい情報に耐える力である。この情報は間違っているかもしれないというあいまいな状況で思考を停止せず、それに耐えて最善を尽くすことは人間にできないことだからである。

この「耐える力」への期待は、情報の真偽を見分けることが容易ではない、いや、ほとんど不可能なあいまい情報への向き合い方から生まれた。そして、私たちに必要なのはAIが不得意とするあいまい情報に対するリテラシーである。その場合、むしろ消極的(ネガティブ)な視点でメディアリテラシーを考えるべきではないのか。それは情報をやり過ごし、不用意に発信しない力である。

(5) このネガティブ・リテラシー(消極的な読み書き能力)と同様な発想法は、精神医学者・^{はなをまほうせい}帚木蓬生の『ネガティブ・ケイパビリティ—— 答えの出ない事態に耐える力』(朝日新聞出版・二〇一七年)でも確認できる。帚木はネガティブ・ケイパビリティを「性急に証明や理由を求めずに、不確実や不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」と定義している。

この言葉は一九世紀英国の詩人ジョン・キーツがシェークスピアの天才的創作の秘訣(ひか)にふれて最初に使用したものである。長らく忘れられていたこの概念は、二つの世界大戦に従軍した英国の精神分析学者ウィルフレッド・R・ピオンによって再発見された。私たちはあいまい情報に直面した場合、このネガティブ・ケイパビリティを意識しない限り、早く「分かる」「理解しよう」とするのが普通である。「ケイパビリティ(能力)とはポジティブ(積極的)であるのが普通である。帚木はその理由を「分かりたがる脳」に求める。その正常な脳を快適状態に保つために、専門家は何ごとであれ標準化・体系化された手引書を用意する。医療現場ではまずマニュアルが参照される。なるほど、私が患者だとしても、病院では速やかに病名を指摘され、はっきり説明されることを望むはずだ。マニュアルを使わず「よくわかりませんね。経過をみましょう」と言われて、安心できる患者は少ないだろう。

同じようにメディアリテラシーのマニュアルとして、前述した情報チェックリスト「ソ・ウ・カ・ナ」や「だ・い・じ・か・な」も使用されていないだろうか。ニュースのあいまいさに耐えることより、まず真偽をわかりやすく識別して安心することを私たちの脳は求めているからである。時間的にも精神的にも余裕のある人でなければ、より広くより深く思考するために判断を引き延ばすことはむずかしい。

だが、精神医療の現場では、病因を不明のままにしておく方が患者にとって望ましい場合も少なくないようだ。何もなくても時間経過で自然に治癒する場合もあり、主治医は不安な患者を「⁽⁶⁾しかと見ている」ことが大切だと帚木は言う。こうしたネガティブ・ケイパビリティの^⑧リンショウウ例からメディアリテラシー教育が学ぶことは少なくないはずだ。専門家を育てる大学人として帚木の次の言葉は心にしみる。

問題解決が余りに強調されると、まず問題設定のときに、問題そのものを平易化してしまう傾向が生まれます。単純な問題なら解決も早いからです。

そうであれば、メディアリテラシー教育でも問題解決を強調すべきではない。イエス／ノーの世論調査、すなわちON／OFF、白／黒のデジタル思考への^⑨テイコウ力を高めること、あいまい情報の中で事態に耐える人間力こそが、AI時代に求められるリテラシーだからである。

あいまい情報をやり過ごし、不用意に発信しない思考がクリティカルシンキングであるのならば、それは「耐性思考」とでも呼ぶべきなのではあるまいか。

(佐藤卓己『あいまいさに耐える——ネガティブ・リテラシーのすすめ』による)

(注) ※「マスゴミ」批判Ⅱテレビや新聞などのマスメディアを中心としたマスゴミの報道姿勢を揶揄する際に用いられる、マスゴミの「ゴミ」を「ゴミ」と言い換えた蔑称。インターネットやSNSを中心に使われることが多い。

※デューイⅡジョン・デューイ(一八五九〜一九五二)。アメリカ合衆国の哲学者・教育学者。

※市民新聞Ⅱ知識層向けの新聞。イギリスでは、一八世紀後半創刊の長い歴史を持つ新聞もある。高級新聞、高級紙とも呼ばれている。事件やスポーツ、芸能関係の記事が多い新聞は、大衆新聞、大衆紙と呼ばれる。

※フィルターバブルⅡ過去の行動、好み、検索履歴などによってパーソナライズされた情報のみを受け取ることによって、ユーザが偏った信念や価値観を持つてしまう事象。

※リップマンⅡウォルター・リップマン(一八八九―一九七四)。アメリカ合衆国の著述家、ジャーナリスト。
 ※ネティズンⅡネットワーク+シティズンの造語。佐藤は、この文章以前に「ネットワークシティズン、略してネティズンが情報通信ネットワークを活用して新たな情報文明の担い手となるという議論」と記している。
 ※フアクトチェックⅡ言説の真偽を検証する活動。

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 空欄 A・B の中に入る言葉として適切なものを次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

【ア きつと イ しかし ウ そのため エ 従って オ おそらく】

問三 傍線部①「そうした教育実践の効果」とあるが、これは、どのような効果か。次のア～オの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学校におけるメディアリテラシー教育により、「吟味思考」に必要な時間が減る、という効果
 イ 学校におけるメディアリテラシー教育により、「吟味思考」する市民の比率が高まる、という効果
 ウ 学校におけるメディアリテラシー教育により、「批判的思考」に必要な時間が減る、という効果
 エ 学校におけるメディアリテラシー教育により、フェイクニュースへの「攻撃」が増える、という効果
 オ 学校におけるメディアリテラシー教育により、マスコミへの「批判」が増える、という効果

問四 傍線部②「現在のメディアリテラシーの困難性」とあるが、このことについて説明した一文を、傍線部②以降の部分から抜き出し、その最初と最後の五文字をそれぞれ書き出すことによって答えなさい。(句読点を含む。)

問五 傍線部③「チ民」の「チ」に相当する漢字を含む言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
 ア 天変千異 イ 糜藩千県 ウ 千水工事 エ 仁義礼チ オ 酒千肉林

問六 傍線部④「それこそが問われるべきではないだろうか」とあるが、筆者は、現代のメディアリテラシー教育で問われるべきことは何だと言っているか、本文中の言葉を用いて、三十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部⑤「このネガティブ・リテラシー(消極的な読み書き能力)と同様な発想法」とあるが、同様な発想法とはたとえばどのようなものか。次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 専門家によって標準化・体系化された手引書を用意すること
 イ 医療現場で患者の病名やその説明にマニュアルを参照すること
 ウ 情報を検討する際に、情報チェックリストを使用すること
 エ 精神医療の現場で、病因を不明のままにしておくこと
 オ 情報分析のプロフェッショナルに情報の検討を任せること

問八 傍線部⑥「しかと見ている」とは、どういう見方をする事か。四十字以内で説明しなさい。

問九 この文章の論旨と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 情報量が爆発的に増大した今日、私たちに最も必要なのは、情報の真偽を素早く簡単に見分ける能力である。
 イ 批判的思考に最も必要なのは、相手の発言に耳を傾け十分な時間をかけて的確に解釈する「吟味思考」である。
 ウ 情報の真偽を見分けられるようになるには、より広くより深いクリティカルシンキングを獲得する必要がある。
 エ 情報量が爆発的に増大した今日、私たちは、受け入れる情報を減量する「デジタル・ダイエット」が必要である。
 オ 今日私たちに必要な力は、あいまい情報の中で事態に耐える人間力や、不用意に発信しない「耐性思考」である。

二 次の文章は、太宰治の小説『女生徒』(一九三九年『文學界』初出)の後半の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

「私」は、父親を亡くし、姉は嫁いで苦小牧で暮らしており、現在は母親と二人で暮らしている少女である。学校帰りにバスから降り、田舎道を通って家に帰る途中、「私」は青草原に仰向けに寝ころがった。問題文は、その寝ころがっている場面から始まる。

「お父さん」と呼んでみる。お父さん、お父さん。夕焼の空は綺麗です。そうして、夕靄は、ピンク色。夕日の光が靄の中に①溶けて、じんと、そのために靄がこんなに、やわらかいピンク色になったのでしょうか。(1)そのピンクの靄がゆらゆら流れて、木立の間にもぐっていったり、路の上を歩いたり、草原を撫でたり、そうして、私のからだを、ふんわり包んでしまいます。私の髪の毛一本一本まで、ピンクの光は、そっと幽かにてらして、そうしてやわらかく撫でてくれます。それよりも、この空は、美しい。このお空には、私うまれてはじめて頭を下げたいのです。私は、いま神様を信じます。これは、この空の色は、なんとという色なのかしら。薔薇。火事。虹。天使の翼。大伽藍。いいえ、そんなじやない。もつと、もつと神々しい。

「みんなを愛したい」と涙が出そうなくらい思いました。じっと空を見ていると、だんだん空が変つてゆくのです。だんだん青味がかってゆくのです。【A】、裸になってしまいましたくなりました。それから、いまほど木の葉や草が透明に、美しく見えたこともありませぬ。そっと草に、さわってみました。

美しく生きたいと思います。

家へ帰ってみると、お客様。お母さんも、もうかえって居られる。きれいに依つて、何か、にぎやかな笑い声。お母さんは、私と二人きりのときには、顔がどんなに笑っていても、声をたてない。けれども、お客様とお話しているときには、顔は、ちっとも笑ってなくて、声ばかり、かん高く笑っている。挨拶して、すぐ裏へまわり、井戸端で手を洗い、靴下脱いで、足を洗っていたら、さかなやさんが来て、お待ちどおさま、まいど、ありがとうと言つて、大きなお魚を一匹、井戸端へ置いていった。なんという、おさかなか、わからないけれど、鱗のこまかいところ、これは北海のもの感じがする。お魚を、お皿に移して、また手を洗っていたら、北海道の夏の臭いがした。おとしの夏休みに、北海道のお姉さんの家へ遊びに行ったときのことを思い出す。苦小牧のお姉さんの家は、海岸に近いゆえか、始終お魚の臭いがしていた。お姉さんが、あのお家のがらんと広いお台所で、夕方ひとり、白い女らしい手で、上手にお魚をお料理していた様子も、はつきり浮かぶ。私は、あのとき、なぜかお姉さんに甘えたくて、【B】、でもお姉さんには、あのころ、もう年ちゃんも生まれていて、お姉さんは、私のものではなかったのだから、それを思えば、ヒュウと冷いすきま風が感じられて、どうしても、姉さんの細い肩に抱きつくことができなくて、死ぬほど寂しい気持で、じっと、あのほの暗いお台所の隅に立ったまま、気の遠くなるほどお姉さんの白くやさしく動く指先を見つめていたことも、思い出される。過ぎ去つたことは、みんな懐かしい。肉親つて、不思議なもの。他人ならば、遠く離れるとしだいに淡く、忘れてゆくものなのに、肉親は、なおさら、懐かしい美しいところばかり思い出されるのだから。

井戸端の茱萸の実が、ほんのりあかく色づいている。もう二週間もしたら、たべられるようになるかも知れない。去年は、おかしかった。私が夕方ひとりで茱萸をとつてたべていたら、ジャビイ黙って見ているので、可哀想で一つやった。そしたら、ジャビイ食べちゃった。また二つやったら、食べた。あんまり面白くて、この木をゆすぶって、ポタポタ落としたら、ジャビイ夢中になって食べはじめた。ばかなやつ。茱萸を食べる犬なんて、はじめてだ。私も背伸びしては、茱萸をとつて食べている。ジャビイも下で食べている。可笑しかった。そのこと、思い出したら、ジャビイを懐かしくて、

「ジャビイ！」と呼んだ。

ジャビイは、玄関のほうから、気取つて走つて来た。急に、歯ぎしりするほどジャビイを可愛くなっちゃつて、シッポを強く掴むと、ジャビイは私の手を柔かく噛んだ。涙が出そうな気持になって、打つてやる。ジャビイは、平気で、井戸端の水を音をたてて呑む。

お部屋へはいると、ぼつと電燈が、ともっている。しんとしている。お父さんいない。やっぱり、お父さんがいないと、家の中に、どこか大きいクウセキが、ポカンと残つて在るような気がして、身悶えしたくなる。和服に着換え、脱ぎ捨てた下着の薔薇にきれいなキスして、それから鏡台のまえに坐つたら、客間のほうからお母さんたちの笑い声が、どつと起つて、私は、なんだか、むかつとなつた。お母さんは、私と二人きりのときはいいけれど、お客が来たときには、へんに私から遠くなつて、冷くよそよそしく、私はそんな時に、一ばんお父さんが懐かしく【C】なる。

鏡を覗くと、私の顔は、おや、と思うほど活き活きしている。(2)顔は、他人だ。私自身の悲しさや苦しさを、そんな心持とは、全然関係なく、別個に自由に活きている。きようは頬紅も、つけないのに、こんなに頬がぼつと赤くて、それに、唇も小さく赤く光つて、可愛い。眼鏡をはずして、そつと笑つてみる。眼が、とつてもいい。青く青く、澄んでいる。美しい夕空を、ながいこと見つめたから、こんなにいい目になったのかしら。(一)

少し浮き浮きして台所へ行き、お米をといでいるうちに、また悲しくなつてしまった。せんの小金井の家が懐かしい。胸が焼けるほど恋しい。あの、いいお家には、お父さんもいらしたし、お姉さんもいた。お母さんだって、若かった。私が学校から帰つて来ると、お母さんと、お姉さんと、何か面白そうに台所か、茶の間で話をしている。おやつを貰つて、ひとしきり二人に甘えたり、お姉さんに喧嘩ふっかけたり、それからきまつて叱られて、外へ飛び出して遠くへ遠くへ自転車乗り。夕方には帰つて来て、それから楽しく御飯だ。本当に楽しかった。自分を見詰めたたり、フケツにぎくしゃくすることも無く、ただ、甘えて居ればよかったのだ。なんという大きい特権を私はキョウジュしていたことだろう。しかも平気で。心配もなく、寂しさもなく、苦しみもなかった。お父さんは、立派なよいお父さんだった。お姉さんは、優しく、私は、いつもお姉さんにぶらさがつてばかりいた。(二)けれども、すこしずつ大きくなるにつれて、だいたい私が自身いやらしくなつて、私の特権はいつの間にか消失して、あかはだか、醜い醜い。ちつとも、ひとに甘えることができなくなつて、考えこんでばかりいて、くるしいことばかり多くなつた。お姉さんは、お嫁にいつてしまったし、お父さんは、もういない。たつたお母さんと私だけになつてしまった。お母さん

もお淋しいことばかりなのだろう。こないだもお母さんは、「もうこれからさきは、生きる楽しみがなくなっちゃった。あなたを見たって、私は、ほんとうは、あまり楽しみを感じない。ゆるしてお呉れ。幸福も、お父さんがいらっしやらなければ、来ないほうがよい」とおっしゃった。蚊が出て来ると、ふとお父さんを思い出し、ほだきものをすると、お父さんを思い出し、爪を切るときにもお父さんを思い出し、お茶がおいしいときにも、きつとお父さんを思い出すのである。私が、どんなにお母さんの気持をいたわって、話し相手になってあげても、やっぱりお父さんとは違うのだ。夫婦愛というものは、この世の中で一ばん強いもので、肉親の愛よりも、尊いものにちがいない。生意気なこと考えたので、ひとりで顔があかくなつて来て、私は、濡れた手で髪をかきあげる。しゅっしゅっとお米をときながら、私は、お母さんが可愛く、いじらしくなつて、大事にしようと、しんから思う。こんなウエーヴかけた髪なんか、さつそく解きほぐしてしまつて、そうして髪の毛をもつと長く伸ばそう。お母さんは、せんから、私の髪の毛の短いのを厭がっていらしたから、うんと伸ばして、きちんと結つて見せたら、よろこぶだろう。(Ⅲ) けれども、そんなことまでして、お母さんを、いたわるのも厭だな。いやらしい。考えてみると、このころの、私のいらいらは、ずいぶんお母さんと関係がある。お母さんの気持に、びったり添ったいい娘でありたいし、それだからとて、へんに御機嫌とるのもいやなのだ。だまつても、お母さん、私の気持をちゃんとわかつて安心していらしたら、一番いいのだ。私は、どんなに、わがままでも、決して世間の物笑いになるようなことはしないのだし、つらくても、淋しくつても、だいじのところは、きちんと守つて、そうしてお母さんと、この家とを、愛して愛して、愛しているのだから、お母さんも、私を絶対に信じて、ぼんやりのおんきにしていれば、それでいいのだ。私は、きつと立派にやる。(Ⅲ) にしてつとめる。それがいまの私にとつても、一ばん大きいよろこびなんだし、生きる道だと思つているのに、お母さんたら、ちつとも私を信頼しないで、まだまだ、子供あつかいにしている。私が子供っぽいこと言うと、お母さんはよろこんで、こないだも、私が、ばからしい、わざとウクレレ持ち出して、ポンポンやつてはしゃいで見せたら、お母さんは、しんから嬉しそうにして、「おや、雨かな？ 雨だれの音が聞えるね」と、とぼけて言つて、私をからかつて、私が、本気でウクレレなんか熱中して居ると思つて、いるらしい様子なので、私は、あさましくて、泣きたくなつた。お母さん、私は、もう大人なのですよ。世の中の、なんでも、もう知つて、いるのですよ。安心して、私になんでも相談して下さい。うちの経済のことなんかでも、私に全部打ち明けて、こんな状態だから、おまえもと言つて下さつたなら、私は決して、靴なんかねだりはしません。しっかりした、つましい、つましい娘になります。ほんとうに、それは、たしかなのです。それなのに。ああ、それなのに、という歌があつたのを思い出して、ひとりですくすく笑つてしまつた。気がつくと、私はほんやりお鍋なべに両手をつつこんだままで、ばかみたいに、あれこれ考えていたのである。

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 傍線部(1)に使われている表現方法を何というか、漢字で答えなさい。

問三 空欄【A】～【C】の中に入る言葉として適切なものを、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 心がワクワクして イ ただ、溜息ばかりで ウ 悲しく エ たまらなく焦がれて オ てれくさく

問四 傍線部(2)「顔は、他人だ」とあるが、これはどういうことを述べているのか。文中の言葉を使って説明しなさい。

問五 本文には「しめたものだ。」という一文が抜けている。(Ⅰ)～(Ⅲ)のうちどこに入れたらよいか、記号で答えなさい。

問六 傍線部(3)「身を」()にして」とあるが、()に漢字一字を入れて、「非常に骨を折る」という意味の慣用句にしなさい。

問七 この文章の表現上の特徴として適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 主人公の日常の会話を中心にした、口語体で描かれている。
イ 主人公の心理が、全体的に理知的で分析的に描かれている。
ウ 主人公の心理が、一人で台詞を語る独白体で描かれている。
エ オノマトペの多用で、リズム感のある表現で描かれている。
オ 自虐的な表現により、全体的に暗い雰囲気ふんいきで描かれている。

問八 波線部「お母さん、私は、もう大人なのですよ。」とあるが、あなたが「大人になった」と思つた経緯とその時の気持ちを、二百字以内で書きなさい。(句読点を含む。)

三 次の古文は、京から太宰府に左遷された菅原道真の和歌と、それにまつわる『醒睡笑』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

ア 東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ (『拾遺和歌集』)

百三十年あまりの後かとよ。筑前の国 宰府の天神の飛梅、[※]天火に焼けて、ふたたび花咲かず。「こはそも¹浅ましきことや」と人皆涙を流し、²知るも知らぬも集まりて、思ひ思ひの短冊をつけ³参らする中に、権校坊とて勇猛精進なる老僧の⁴詠める歌

A 殊勝なれ。

天をさへかけりし梅の根につかば⁵土よりもなど花のひらけぬ

短冊を木の枝に結びて、足を引かれければ、⁶すなはち緑の色めきわたり、花咲く春にかへりしことよ。人々感に堪へて、かの沙門を、神とも仏とも手を合はせし。

※ 「梅はこれ 我が愛木」と賞せさせたまひ、

いづくにも梅 B あらば我とせよたとひ 社はありとなしとも

梅あらば⁷賤しきしづが 伏家にも我立ちよらん 悪魔しりぞけ

(『醒睡笑』より)

(注) ※宰府 太宰府のこと。 ※天火 落雷による火災。 ※沙門 ここは老僧のこと。
 ※我が道真公の。以降の「我」も道真公を指す。 ※伏家 みすぼらしい家。

問一 和歌中の波線部ア「東風」・イ「社」の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えなさい。

問二 文中の空欄 A ・ B に入る語を、それぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア なむ イ だに ウ や エこそ オより カか

問三 傍線部1「浅ましき」・6「すなはち」の意味を、それぞれ答えなさい。

問四 傍線部2「知るも知らぬも集まりて」とあるが、何を「知る・知らぬ」といつているのか。古文中の語句を書き抜いて答えなさい。

問五 傍線部3「参らする」と4「詠める」を文法的に説明した次の文の、(①)〜(⑤)に入る適当な語句を答えなさい。

「参らする」は、謙譲の(①)「参らす」の(②)形である。また、「詠める」は、四段動詞の(③)形に(④)の助動詞「(⑤)」の連体形が接続したものである。

問六 傍線部5は、「土壌の悪さではなさそうなのにどうして花が咲かないのか」という意味である。老僧が「土のせいではあるまい」と考えた根拠は何か。四十字以内で答えなさい。

問七 傍線部7「賤しきしづが伏家にも我立ちよらん」を現代語訳しなさい。